

『京城日報』の紀元二六〇〇年記念イベント

浜田幸絵

一 はじめに

一九四〇年は、神武天皇即位の年を紀元とする紀年法で二六〇〇年目となる節目の年であった。この年には、「紀元二六〇〇年」を記念して大小様々な事業が行われた。

政府の紀元二六〇〇年奉祝記念事業としては、一九三六年一月に「橿原神宮境域並畝傍山東北陵参道ノ拡張整備」「神武天皇聖蹟ノ調査保存顕彰」「御陵参拝道路ノ改良」「日本万国博覧会ノ開催」「国史館ノ建設」「日本文化大観ノ編纂出版」が指定され、一九三八年七月一日には「宮崎神宮境域ノ拡張整備」が追加された。ほかにも、政府の記念事業から外れたものの紀元二六〇〇年にあわせて第十二回国際オリンピック大会の開催が予定されていた。

日中戦争の長期化にともない、一九三八年七月一五日に

は物心両面の総動員を理由として、上記の事業のうち、オリンピックの返上、万国博覧会の日中戦争終結までの延期が決まった。戦時体制が強化されるなか、紀元二六〇〇年奉祝は、元々の計画通りの実施というわけにはいかず、国際的イベントが中止され祝典事務局による審査が課されるなど、抑制されていた側面もあった。しかし一九四〇年一月一〇日（一九二八年に天皇の即位式が行われた日）とその翌日には、宮城前広場で天皇皇后臨席のもと紀元二六〇〇年祝典と奉祝会が盛大に開催され、内外から五万人以上が集結した¹。政府編纂の公式記録『紀元二千六百年祝典記録』では、官庁・各種団体・新聞通信社などから祝典事務局に報告があった記念事業の総数は一五四〇五件、記念行事の総数は一二八二二件となっている。このなかには「外地」における事業が三二〇五件、行事が一六一四件、「海

外」における事業が一四九件、行事が三六八件含まれている。紀元二六〇〇年記念事業・行事は「内地」以外でもかなり行われていたのである。

本稿では、朝鮮総督府の機関紙を発行していた京城日报社による紀元二六〇〇年記念イベントの検討を通じて、当時、南次郎総督のもとで皇民化政策が進められていた朝鮮において紀元二六〇〇年奉祝イベントが果たした役割を解明する。一九三六年八月に朝鮮総督に就任した南は、朝鮮統治の目標として「天皇の行幸を仰ぐこと」と「徴兵制の施行」を定めた。当時の南の認識は、朝鮮民衆の統治への不満は根強く、安心して天皇行幸や徴兵制が実施できるほど「国民としての心構え」が浸透してはいない、というものであった。日中戦争が始まると、総督府は「内鮮一体」を唱え、朝鮮人を「皇国臣民」とするための諸政策——「皇国臣民の誓詞」制定（一九三七年一〇月）、特別志願兵制度（一九三八年二月）、教育令の改正（一九三八年三月）、創氏改名（一九三九年一月）——を次々と打ち出し実施した。朝鮮人のなかには、「内鮮一体」によって朝鮮人の地位向上を図ろうとして、総督府の皇民化政策に積極的に協力した親日派もいた。しかし朝鮮の一般民衆は、早魃に襲われるなどして困窮し、日本に対する不信感を募らせていた。皇民化政策が急速に推進されるなかで「支配される側

のおかれた現実」と「支配する側の掲げる論理」との間に大きな矛盾と乖離が生じていたといえよう。このような状況において、支配する側のメディアによる文化事業——京城日报社の紀元二六〇〇年奉祝——は、誰に対してどのようなメッセージを発していたのだろうか。

紀元二六〇〇年奉祝イベントについては、すでに多くの研究が蓄積されている。しかし、これまで研究対象として取り上げられてきたのは、専ら「内地」の動向であり、紀元二六〇〇年奉祝の意味は、「内地」と植民地（「外地」）とは異なっていたように思える。紀元二六〇〇年奉祝において「内地」の一般国民が優先的に見出したのは経済的・娯楽的意味合いであったかもしれないが、政府は、紀元二六〇〇年を皇国の歴史を宣揚し国民を統合する機会として認識していた。現地住民の「日本人化」が喫緊の課題となっていた植民地において、紀元二六〇〇年奉祝がどのような展開をみせていたのかは、日本の植民地支配や戦時体制の仕組みを考える上で検討すべき課題である。本稿では、京城日报社の紀元二六〇〇年記念イベントとその新聞表象を分析・考察する。

本題に入る前に、『京城日報』について基本的なことを述べておきたい。『京城日報』は、初代統監伊藤博文の指示により一九〇六年九月一日に統監府の機関紙として創刊

された。統監府（一九一〇年八月二十九日の日韓併合により総督府）との関係は非常に密接で、人事面では統監（のちに総督）の信任する人物が社長になり、財政面では総督府から援助を受けていた。当然のことながら、論調も統監府・総督府の政策を周知徹底あるいは正当化するものとなっていた。京城日報社は、総督府のバックアップを受けた朝鮮の最有力新聞社で、一九四〇年八月の二大朝鮮人経営新聞（『朝鮮日報』『東亞日報』）の廃刊によって、その位置は確固たるものになった。一九四〇年末時点の朝鮮で刊行されていた日刊新聞は、内地人発行の新聞が二三紙（うち二紙は専門紙、一紙は小学生新聞）、朝鮮人発行の新聞が二紙（うち一紙は専門紙）あったが、『日本新聞年鑑（昭和一六年版）』によると、『京城日報』は内地人発行新聞のなかでは最も有力で朝鮮各地で読まれており、発行部数は一八万部であった。

『京城日報』の読者層をはっきりと示す資料はない。ただ、一九四〇年の『朝鮮出版警察概要』によると、朝鮮で購読されていた『大阪毎日新聞』と『朝日新聞（西部）』は、購読者の四分の一近くが朝鮮人、『大毎小学生新聞』は購読者の半数が朝鮮人であった。日本語を解する朝鮮人の割合は、一九一八年末には一・八%、一九三三年末には七・八%であったが、一九三九年末には一三・九%になってい

る。このことから『京城日報』や京城日報社の小学生新聞（『京日小学生新聞』）の読者にも、ある程度、親日的な朝鮮人が含まれていたと推測できる。しかし、朝鮮の総人口の約九七%は朝鮮人であり、日本語新聞を読んでいた朝鮮人は、朝鮮人全体からみると極一部にすぎない。

なお本稿では、歴史的事相を示すために、『京城』『満洲』『内地』『外地』など当時の地名や呼称、引用史料中に含まれる不適切な表現もそのまま使用する。

二 一九四〇年元旦の事業発表

一九四〇年一月一日の『京城日報』は、一面に白馬に跨る天皇の写真を掲載して、「聖上の御精励」ぶりを伝えるとともに、朝鮮指導部（南次郎朝鮮総督、川島義之国民精神総動員朝鮮連盟総裁、中村孝太郎朝鮮軍司令官陸軍大将）による皇紀二六〇〇年を迎えての論説を載せている。そして三面に「皇紀二千六百年記念・本社画期的五大事業」と題して、次の社告を大々的に掲げている。

天に皇紀二千六百年の瑞光あふれ地に始政三十周年の慶色みなぎる、皇国半島いまや文化は花と咲き誇り、興亜維新へ丹心は躍る、創刊以来三十五年、けふのためにこそ心肝を砕き来つた京城日報社はこの栄光を讃へると

共に更に悠久の弥栄を祈るためこゝに次の如き皇紀二千年六百年記念大企画を敢行すること、なつた、蓋し歴史ある躍進京日にはじめて企て得られるところであるが、就中朝鮮大博覧会は過去日本新聞界におけるこの種企画の中真に未曾有の大規模のものであり、豪華絢爛の盛観は正に輝く世紀の縮図をなすもの……満天下の矚目を信じて疑はない¹⁷⁾

一九四〇年は、神話上の神武天皇即位から二六〇〇年目にあたるのみならず、朝鮮半島にとっては一九一〇年の日韓併合から三〇年目にあたり、『京城日報』創刊から三五年目にあつてゐた。一九四〇年は、京城日報社にとつては三つの意味で節目の年であつたのである。

京城日報社が元旦の紙面で発表した「画期的五大事業」とは、朝鮮大博覧会、伊勢神宮聖火奉遷継走、全鮮小学生代表檀原神宮参拝、聖地の団体巡拝、一千元懸賞長編小説募集であつた。このうち元旦の社告で日程が明記されてゐるのは、「紀元の佳節（二月一日）」に朝鮮神宮に奉納される聖火奉送継走、「天長節（四月二十九日）」を期した小学生代表の檀原神宮参拝、二月六日に京城を出発する聖地団体巡拝の三事業のみである。

紀元二六〇〇年を記念して京城日報社が催したイベント

は、元旦に発表された五大事業の他にも多数存在する。また、五大事業のなかでも紙面での扱いに違いがあり、事業内容が具体化するにつれて事業の重要度が変化していったと考えられる。今回筆者は一九四〇年の一月から二月までの紙面に目を通したものの、一千元懸賞長編小説募集については見当たらなかつた。以下では、長編小説募集を除く五大事業について、適宜、他のイベントにも言及しながらみていく。

三 紀元節に向けて（聖地巡拝団と伊勢皇大神宮聖火奉遷継走）

五大事業のうち最初に具体的内容が発表されたのは、聖地巡拝団である。一月一日に掲載された社告によると、聖地巡拝団は、二月六日に京城駅を出発、檀原神宮、伊勢大廟、熱田神宮、明治神宮、靖国神社、宮城を「巡拝」して、二月一七日に京城駅に戻ってくる。巡拝先とは別に、東京滞在中に日光東照宮も参拝するとある。会費は一名一三五円で、申込先は京城日報事業部か三中井ツーリスト・ビューローとなつてゐる。¹⁸⁾「聖地巡拝団募集」の広告は、その後一月一七日にも出ているが、旅行中の報道はなく、出発と帰城の報道があるだけである。しかも出発の報道は一段一四行と小さく、¹⁹⁾帰城の報道も写真つきで二段ではあ

るが一行しかない²⁰。旅行中の記事がないため確かなことはわからないが、出発時の報道によれば旅行団には「全鮮各地の敬神の念厚い人ばかり内鮮一体の五十九名²¹」が参加、紀元節には宮城遙拝を行ったはずである。参加者名簿は掲載されていないため日本人・朝鮮人の割合は不明である。

元旦に公表した五大事業のなかでは最も早い時期に実施されたにもかかわらず、聖地巡拝団が紙面ではそれほど取り上げられていない理由は、次のように推測できる。まず、一九四〇年には、聖地巡拝型の旅行が盛んに行われており、神武天皇ゆかりの地とされた奈良、宮崎、天照大御神を祀った伊勢神宮などを訪れる人々が急増した²²。この旅行ブームは、朝鮮・台湾・満洲などをも巻き込んだもので、外地から内地を訪れた人も少なくなかった。例えば昭和一五年に宿泊を伴って朝鮮から奈良にやってきた観光客は、一八万人で、²³『京城日報』も鉄道省が内地渡航の申込を早めに行うよう呼びかけていることを報じている²⁴。聖地巡拝旅行は、京城日報社の紀元二六〇〇年記念事業の第一弾であったが、紙面で大きく取り上げるには新奇性に欠けていたと考えられる。

京城日報社の事業としても、内地への旅行団派遣は恒例行事となっていて、一九四〇年の時点において特別なニュース価値を見出すことは難しかった。一九二〇年刊行の

『京城日報社誌』によると、京城日报社は、明治末期から度々朝鮮人を内地に派遣し日本の状況（博覧会や近代的工場など）を視察させていたし、中国や満洲に派遣して現地を見学させることもあった²⁵。一九四〇年には、「紀元二千六百年奉祝記念」の聖地巡拝団よりも、同じく自社主催で行った「新東亜建設」の最前線を視察する北支蒙疆視察団のほうが紙面で大きく取り上げられている。北支蒙疆であるという認識を深めさせる目的があり、単なる内地の「聖地巡拝」よりも意義があると考えられていたのだろう²⁶。

また聖地巡拝団が内地を旅行した時期には、京城日报社のもう一つの事業である伊勢皇大神宮聖火奉送継走が佳境を迎えており、紀元節にあわせて創氏改名の受付が始まった²⁷。聖地巡拝団は、朝鮮各地から集まった参加者たちが内地の聖地を巡拝して「内鮮一体」を実践するイベントであった。だが、それ以上に大掛かりに「内鮮一体」を象徴的に示すイベントが同時進行していて、紙面の関心は、そちらに移っていたのである²⁸。

聖地巡拝団の募集とほぼ時を同じくして、イベントの具体的内容が公表されたのが、伊勢皇大神宮聖火奉送継走である²⁹。この行事は、京城日报社と朝鮮聯合青年団が合同で主催（「奉還奉仕」³⁰と表現された）していた。朝鮮聯合青

年団は、一九三八年九月二四日に朝鮮における青年団の普及と皇国精神の振起を目的として結成され、神社造営・砂防工事への動員や靖国神社参拝・皇居巡拝団の派遣を行っていた。朝鮮総督府は、独立運動の組織とならないよう細心の注意を払いながら朝鮮青年の組織化を進めていた。総督府は、日中戦争勃発後に青年団普及の重要性を一層強く認識するようになっていたものの、内地と同じように青年団を組織することは朝鮮では現実的ではなかった。内地の青年団は全員参加で団長も団員から選ばれていたのに対し、朝鮮では、青年団の団員は基本的には初等学校出身者で「志操堅実なる者」に限定されていて、団長には初等学校長が就任することになっていた。朝鮮の青年団は、思想的にも言語的にも親的な一部の青年が、「内鮮一体」への貢献を期待されて組織されていたといえる。伊勢皇大神宮聖火奉遷継走では、各道の青年団で二名の「聖火の使徒」、その他に伴走や護衛などにあたる青年が選出された。『京城日報』には選出された青年の名前が掲載されているが、前から判断して五六名のうち四一名が朝鮮人とみられる。

聖火奉遷継走も、聖地巡拝団と同様に紀元節に合わせた企画であった。愛国日である二月一日に代表者が伊勢神宮で拝受した聖火と火鑽具は、大阪・下関を経由し、二月三日に朝鮮半島に上陸した。継走は、二月三日に釜山を出発、

一週間かけて五五九キロを北上し、二月九日に京城に到着した。

紙面によれば、沿道住民は、期待をもって聖火を迎え入れた。企画発表後から、京城日報社には、各地から通過を要請する声が続出した。「聖火の使徒」に選ばれた青年団員(名前とコメントの内容から朝鮮人であることがわかる)は、「夢かと思ひました。実に一家一門の名譽は勿論、篤所青年団の名譽であり、茂山と咸北の代表として責任あることですから全誠心をつくして御奉仕して参ります、私は毎年志願兵を応募してゐますが、残念ながら選に漏れてゐますが、この光榮の代表となつた機会に今度こそは採用されるやう、神宮に祈願して来ます」と決意を語つた。

しかし、こうした新聞表象は、現実の朝鮮人の一般的态度とは異なっていた可能性が高い。宮田節子の実証研究によると、朝鮮人を軍隊へ取り込むことへの不安は根強く、一九三八年二月に陸軍特別志願制度が導入されたものの、その選考過程は煩雑だった。定員に対して志願者数はかなり多く集まっていたが、その背景には、権力による志願の強制や農民の貧困があったという。「聖火の使徒」となった朝鮮人青年団員のコメントは、志願兵になることを熱望してはいるが実際には採用されない「模範的朝鮮人青年」の多さを暗示している。だが、総督府警保局が治安情勢に

対処するために月刊で発行していた『高等外事月報』は、ちょうどこの頃、「朝鮮は何千年と云ふ歴史を持つて居る国であるのに、日本の為に特別志願兵となり戦争に行く等は全く祖国を知らぬ者である」⁴⁵「目下学校に於て貧困児童に配給しつゝ、ある昼食を食ふ者は特別志願兵に採用されるのだ」⁴⁷といった「不穩言動」を掲載している。総督府は朝鮮軍の強い要請に応じるかたちで志願兵制度を導入したわけであるが、朝鮮人を軍隊のなかに取り込むことへの不安は根強かった。『京城日報』は、皇軍の兵士としてふさわしい朝鮮人が増えることを望む立場からの「よき朝鮮人青年」を描いていたのである。

継走が始まると『京城日報』は、沿道住民が真新しい日の丸を掲げて寒さのなか何時間も行列の到着を待ち、学校も教育的意義から生徒・児童に奉迎をさせた、土下座をした者もいた、という記事を掲載した。⁴⁸ここにも、京城日报社や総督府にとつての朝鮮人民衆の「理想像」が投影されていたといえる。京城到着後の儀式においても、住民がよく関わっていることが伝えられた。「赤誠の奉仕」⁴⁹によつて京城に到着した聖火と火鑽具は、朝鮮神宮に奉納された。奉納された聖火は、紀元節（一一日）まで希望者に頒火された。全鮮各地から奉獻された饌米と聖火を用いて作られた餅も配られた。⁴⁰火鑽具は久遠に南山の御殿に奉安され

諸々の神事に用いられることになっていていた。⁴¹イベントそれ自体が、「皇国の火」が、朝鮮の「領土」と「将来」に波及していくという物語をもつていたといえる。

四 天長節のイベント（全鮮小学生代表檀原神宮参拝）

聖火奉送継走の終了後、紀元二六〇〇年事業としては朝鮮大博覧会が紙面で多く取り上げられるようになった。これについては、次章で述べることにして、まずは、天長節（四月二九日）に合わせて行われた全鮮小学生代表檀原神宮参拝についてみておきたい。

小学生を内地に派遣するというイベントは、決して珍しくはなかった。前年にも、京城日报社は『京日小学生新聞』一周年記念として学童代表の伊勢参拝を行っている。⁴²一九四〇年には、他の団体でも子供を内地に派遣する企画があった。仁川教育会では、紀元節にあわせて小学生六二名を派遣し、檀原神宮や伊勢神宮を参拝させていた。⁴³三月下旬には、朝鮮総督府のバックアップを受けて、戦没者遺家族の子供たちが「英霊と化した軍国の父」⁴⁴を訪ねて靖国神社を参拝している。

児童代表の檀原神宮参拝は「皇道半島の将来を双肩に担ふ之ら第二国民に一系の皇統連綿として万世に渝ることなく、万邦に輝くわが国体の尊厳さを体得せしめることは現

下国民精神教育上最も緊要なる」との認識に基づいていた。⁴⁵ 子供たちを皇国臣民として教育するために、児童代表の内地派遣が有効であると考えられていたのだろう。

京城日報社の学童代表は、各道・府教育会によって各道から二名、京城府から三名、計二九名が選ばれた。⁴⁶ 記事に登場する児童の名前は全て朝鮮人の名前で、学務局長塩原時三郎が「大きくなったら志願兵になるように」と勧めていることから、日本人児童は含まれていたとしても少数であったと考えられる。出発前日の四月二三日に京城日報社に集合し、朝鮮総督府訪問、朝鮮神宮参拝、府民館での壮行会を行って、特急列車「あかつき」で釜山へ移動した。釜山経由で下関に到着した一行は、内地では、大阪を見物した後、橿原神宮参拝、奈良見学、伊勢神宮参拝、名古屋で市内見学と熱田神宮参拝といった日程をこなし、東京へと向かった。天長節には、東京で宮城を遙拝した後、靖国神社、明治神宮を参拝した。その後、帰路に京都に寄って市内見学、桃山御陵・乃木神社参拝、五月四日に京城に戻った。

紀元節に行われた成人の聖地巡拝団とは対照的に、小学生の巡拝団については、旅行中の動静が逐一詳細に報道された。特に目立つのは、学童代表の優等生ぶりである。これは、児童たちの敬虔さが伝わる参拝姿の写真や代表の発

する言葉によって強調されている。釜山へ向かう車中で田中拓務次官から「皆さんは半島百万児童のうちから選ばれた立派な少年です、内地も朝鮮もこれからは青少年が打つて一丸となつて皇国日本を背負つて行く責任があります。それには大人になつた人よりも皆さん方の正しい心構へが必要で、内地に行かれたら日本の立派な精神がどんなところから生まれたかは聖地を巡拝すればよく判ります」と声を掛けられると、代表児童は「唯今はまことに有難うございました、次官閣下の有難い御訓示を心にこめて代表児童としての使命を果すことをお誓ひ申します」と返答する。京都では出迎えに来た京都の児童に対し、「われ／＼二十九名は内地の立派な所を胸に刻んで帰り、そして皆さんから受けた歓迎の嬉しさを百万半島児童に伝へます、これから仲良くして立派な皇国臣民となりませう」と述べている。⁴⁷ 日本人、とりわけ支配層に従順で、日本による朝鮮の植民地化に謝意を表する半島の子供たちの姿が、紙面で繰り返し報道されていたのである。

一方で、記事は、児童たちが日本人としての自覚を一層強めるとともに、内地を優位、朝鮮を劣位におくような序列構造について内面化していく様子も伝えている。例えば児童代表が京城に戻った翌日には、児童代表の兪君の次のような感想が紙面に掲載されている。

各神宮に参拝しますと、よく解らないが、何となく有難い気分がして自然と頭が下がりました、殊に靖国神社は九段の坂下から拝殿までぎつしり人がつまつて押すなぐの出入です、人が沢山あるのにも驚いたけれど、内地の人は本当に敬神の念が厚いのだと感心しました、東京では地下鉄が走つてゐるのと、丸ビルなんかの高いことにびつくりしました、それから東京で交通整理が巡査などゐないでうまくいつているのが不思議でした、内地と朝鮮では動物も異ひます、春日神社では鹿が馴れ馴れしく僕達のところへ寄つてくるのです、朝鮮では動物は人が行くと逃げるんだけど、内地ぢやアかへつて寄つてくるんですね、内地の人は動物を可愛がるやさしい心を持つてゐるんでせう⁵⁰

朝鮮人の子供が、内地で目にした人々の優しさ、神社に対する態度、科学技術の卓越性、交通の秩序ある様子を賛美する。内地の優越性を認識し、内地と朝鮮とが一体となることを喜ぶ児童たちの姿は、支配層が理想として考えていた朝鮮民衆の姿であつた。内地における朝鮮人蔑視の風潮は根強く、反発を覚える内地在住朝鮮人は少なくなかつた。このことは「内鮮一体」の推進者も十分に認識して、「内鮮一体」実現のためには内地人の差別意識を変え

ることが必要だとされていた⁵¹。しかし、紙面のなかの児童たちは、内地の人々に温かく迎え入れてもらったことを感謝することはあつても、内地における朝鮮人差別について語ることはない。この「模範的児童」たちには、周りの朝鮮人を啓蒙する役割——「旅行後は学校のお友達や家庭の人々にその（引用者注：日本精神と日本文化の真髄をつかんだ）感激をよくお伝へして、全鮮の小學生に皇国臣民としての覚悟を一層吹きこむ⁵²」こと——が期待されていた。

帝国臣民の旅行団のなかでも、特に児童の旅行団が重視されていたことには、朝鮮統治政策上の子供たちの位置づけが影響していたと考えられる。日中戦争が始まると「内鮮一体」が唱えられ、一九三八年二月に陸軍特別志願兵令が公布、同年三月に第三次朝鮮教育令が改正された。第三次教育令改正によつて、これまでの日本人と朝鮮人（国語常用者と非常用者）を別々にした教育制度が撤廃され、朝鮮語は必修科目から随意科目となつた。『京城日報』には、仁川では一九四〇年度から学校内での朝鮮語の授業を全廃したという記事もある⁵³。教育制度の一体化は、「内鮮一体」への前進を示し、南が総督就任時に朝鮮統治の目標として掲げていた天皇の朝鮮行幸や徴兵制施行の実現へと近づき、特に子供たちを皇国臣民として育成することは、天皇行幸や徴兵制施行を早い時期に達成するための方策であつた。

朝鮮の民衆に日本精神を植えつけ真の意味で皇民化をすすめるうえで若い世代（児童）の教育が重要であるという認識は、この時期の子供向けイベントに共通してみられた。『京小学生新聞』自体が、総督府や京城日報社が子供たちへの教育が重要であると認識したことから「朝鮮改正教育令実施記念」⁽⁵⁵⁾として創刊された新聞である。京城日報社が子供を対象として開催したイベントは、『京小学生新聞』創刊後に加え、一九四〇年には、全鮮優良幼児表彰会（紀元二六〇〇年記念全国児童愛護週間にあわせて毎日新報社と共催）、紀元二六〇〇年記念のことも大会（京城童話協会と共催）、総督賞綴方競争などが行われている。⁽⁵⁶⁾

五 朝鮮大博覧会

京城日報社の紀元二六〇〇年記念事業のなかで、最も大規模に実施されたのが朝鮮大博覧会である。朝鮮大博覧会の会期は、当初九月一日から一〇月二〇日までの五〇日間だったが、三日間延長して一〇月二三日まで開催された。⁽⁵⁷⁾開会日の九月一日は、京城日報創刊三五周年の日であり、一九三九年に国民精神総動員運動の一として定められた内地の「興亜奉公日」、朝鮮では「愛国日」であった。⁽⁵⁸⁾開会日の『京城日報』は、紀元二六〇〇年と始政三〇年を記念した博覧会は、一年半前から計画され延べ二十万人が準備

に携わった「空前の一大博覧会」であり、その使命目的は「一は皇国精神を鼓吹して国体思想の明徴を期し、一は全興亜圏を網羅する軍事、政治、経済、産業、文化の精粹を展示して聖戦下日本の威容を示し、戦時下国民に物心総力の發揮を促して東亜新秩序建設に拍車せんとする」⁽⁵⁹⁾にあると報道している。

これ以前に朝鮮で大規模に開催された博覧会には、始政五年記念朝鮮物産共進会（一九一五年九月一日〜一〇月三十一日）と始政二〇周年記念朝鮮博覧会（一九二九年九月二日〜一〇月三十一日）があり、どちらも総督府主催で朝鮮統治の実績を宣伝する博覧会であった。⁽⁶⁰⁾三〇周年の博覧会にも、本来は朝鮮総督府がするものであるが京城日報社が代行している側面があった。⁽⁶¹⁾なお、いずれの博覧会も同じ時期に開催されているが、これは、会期中に始政記念日（一〇月一日）を挟み込むためであったと考えられる。

朝鮮大博覧会の主催は、京城日報社にとって重要な意味を持っていた。日本（内地）では新聞社が博覧会をよく催していた。京城日報社も一九一五年九月の始政五年記念物産共進会にあわせて家庭博覧会を開催しており、博覧会開催の実績がなかったわけではない。しかし朝鮮大博覧会は、これまで総督府が開催した博覧会が朝鮮や内地の産業振興を主目的としていたのに対し、「全東亜」の政治・文化・

国防・産業経済・技術を網羅する大規模かつ広範な展示内容をもつ博覧会で、これを新聞社が主催したのであった。

『京城日報』は「各方面から朝鮮大博覧会に寄せられた讚辭」を八月一六日から二九日まで一面で連載している。このなかで大阪毎日新聞社社長の奥村信太郎は、博覧会は、短い期間に広くある事物について認識・理解させる点では新聞よりも長けていて、新聞は、博覧会で認識し印象に残ったことをさらに深く理解させるためのものであると述べている。新聞の購読率が高いとはいえない朝鮮において、朝鮮大博覧会は、当局の意図を正しく伝える絶好の機会であった。購読者増加に直結するわけではなかっただろうが、「朝鮮統治」や「聖戦」の大義、さらには「満洲・蒙疆」の現況を民衆に宣伝するには十分であった。

朝鮮大博覧会には、朝鮮だけではなく、支那、満洲、南洋、樺太、そして内地からも来場者があった。特に内地からやってきた人間が、博覧会の規模や展示内容、意義を賞讃していたことは、紙面でも繰り返し報じられた。愛知県の出産者は、「これは大したものです、昭和十二年にわたらの名古屋で開いた三百万円の汎太平洋博覧会からこつち恐らく最大のものでせう。これで我々も出品の甲斐もあつたといふものです」と言っている。内地の参加者からの高評価は、京城日報社の博覧会を権威づける効果があつたと

考えられる。一方で、「半島同胞」や「外地」の見学団も押し寄せたことは、博覧会が、日本の植民地支配のもとにおかれていた広範囲の人々に対する朝鮮半島の紹介という使命を持っていたことを示す。

山路勝彦も指摘しているように、朝鮮大博覧会は軍事色の強い博覧会であった。呼び物の一つは、軍事関係の展示であった。聖戦館では戦場のジオラマ、武勲館では軍刀、双眼鏡、血染のチョッキや日章旗などの遺品、糧友会館には代用食や代用衣服、兵器陳列場には戦車や戦闘機が展示された。戦争と戦争による死を賛美する内容で、遺族たちは「皇国」のために戦った肉親を偲んだ。一〇月七日は、統後奉公強化運動（一〇月七日から二一日）に呼応して「皇軍感謝日」とし、遺族と傷痍軍人を招待した。「皇国発展の歴史」と「内鮮同祖同根の史実」を伝える皇国歴史館や「始政三十年間の半島の歩み」を伝える始政記念館も重要視された。会場の中央には、宮崎県に紀元二六〇〇年を記念して建設されたシンボルである八紘之基柱を象った「建国記念塔」が建てられた。基層部分にあつたのは「日本（内地）」と共にある朝鮮」という物語で、ここでも日本による朝鮮支配の孕む矛盾は覆い隠されていた。

子供重視の傾向は、朝鮮大博覧会でもみられた。博覧会場の三分の一を「子供の国」にあてて遊園地化し、「サア

坊ちゃん嬢ちゃん楽しみに御待ちなさい」と呼びかけた。「子供の国」にはラクダやロバもいた。一〇月六日には「子供デー」で先着二万人に福袋が渡され、三万五千人ほどの子供が入場した。さらに一〇月一八日には「子供の国」半額奉仕、一〇月二〇日には二度目の「子供デー」が開催された。遊園地に子供たちが殺到する様子は、「興亜の偉業を継承するのは僕等、私たち」の自負満々の意気みせて押しかけた」と報道されている。

朝鮮大博覧会は娯楽的 성격も強かった。博覧会場には、演芸館が設けられた。「半島の恋人」と呼ばれた映画スター（文芸峰、金信哉）、満州の映画スターや歌手（鄭曉君、楊□）も来場した。これらの伏線として六月に京城日報社は、紀元二千六百年奉祝事業と称して、東宝日劇ダンシングチームの京城公演を行っている。「東京と同じ様に大掛かりにやる」とされた公演は、東宝日劇ダンシングチームにとっては初めての植民地公演で、『京城日報』は公演の様を連日大きく報じた。朝鮮大博覧会では、奢侈禁止が通達されていた時期であったにもかかわらず、特設館では各地の特産品が売られ高価なものも売れていた。閉幕前の十月には、「子供の国」にいた動物が当たる福引が開催された。内地において紀元二六〇〇年が一般国民のレベルでは娯楽・息抜きのお機として受容されていたのと同様に、朝

鮮大博覧会には「紀元二六〇〇年記念」を冠した娯楽としての側面もあったといえるだろう。

朝鮮大博覧会の最終入場者数は、一三三万四四七六名、このうち、朝鮮内の小中学生団体二二三九団体、二三万余人、満洲国の小学生団体六〇、四千数百人、団体総数は二六〇四団体となっている。修学旅行を利用して、児童・生徒の団体見学を促す方針がとられていたことは、朝鮮大博覧会が「日本（内地）」と共にある朝鮮」という物語を学ばせる教育装置であったことを示している。

六 おわりに

ここまでみてきたように、京城日報社は、紀元二六〇〇年に際して、朝鮮統治の目標に沿うように皇国臣民の育成に貢献するようなイベントを積極的に開催してきた。紀元節に向けて、朝鮮民衆の気持ちを高ぶらせるような行事が十分でないとの判断から、青年団に働きかけて「内鮮一体」をシンボリックに示す聖火継走を開催した。天長節に向けては、朝鮮の児童代表の内地見学を通じて、その家族や他の子供たちに内地の素晴らしさと皇国臣民意識を浸透させようとした。さらに始政三〇周年記念日には、朝鮮大博覧会を開催し、朝鮮民衆に対しては、日本の植民地統治による朝鮮の発展ぶり、皇国日本の歴史と精神、現下の聖戦の

正当性を喧伝し、内地や台湾・満洲などからやってきた見学者に対しては、朝鮮の産業や文化に対する正しい認識を身につけさせようとした。京城日報社は、総督府の統制下にある新聞として、帝国日本の節目の年の節目の日に総督府と足並みを揃えたイベント・メーカーの役割を果たしたのである。

全体としてみると京城日報社の紀元二六〇〇年記念イベントは、広範囲の様々な層を対象としていたことがわかる。記事では、内地人と朝鮮人の別がはっきりと記されることはなかったが、名前などから朝鮮人であることを類推できる人物の模範的振る舞い（「日本人的」な振る舞い）がよく取り上げられた。朝鮮人と日本人を区別はしないというタテマエを貫きつつも「朝鮮人らしさ」を微かに示すことよって、『京城日報』は、「一連のイベントを通じて朝鮮人が教化されていく様子を伝えていたといえる。紙面表象で重要視されたのは、皇民化政策の要である青年や児童たちであった。この層（特に子供）は、学校教育を通じて、「日本人」の言語や歴史観、天皇に対する忠誠心を内面化して、総督府側にとって「朝鮮人の見本」のような存在であったといえるだろう。『京城日報』は、この「模範的な朝鮮人青年・児童」を新聞紙面に繰り返し登場させることで、こうした青年や児童の考え方や態度が、他の者た

ち―特に親世代―へと波及することを狙っていたのではないだろうか。学務局の塩原時三郎は、朝鮮における精神総動員運動についての講演のなかで次のように述べている。

今日学校でどれだけの者が所謂皇国民の教育を受けてゐるかと思せば、百二、三十万人、これだけは数年間白紙のやうな綺麗な気持の子供を預かつて充分な皇国民の教育を施すのでありますから、この方面は徹底しますが、奈何せん百数十万では二千三百万人の半分にも当らない。その他の団体、青年団、婦人会乃至は農村振興の色々の団体、これらも学校教育程濃厚ではないけれども、或程度の希薄さを以て教化の舞台になつてゐるのであります。これも合せて先づ五百万人位しかない。その他千七八百万人の者は全部未開の野に残されて、大して教化の手も及んでゐない。⁸⁾

徴兵制導入や参政権付与のためには、真の意味での朝鮮人の皇国民化が必要であるとし、そのための政策を立案していた塩原は、朝鮮人のおかれた現状を齒がゆく思っていた。この講演では総動員聯盟の重要性を主張している。こうした認識が支配層の間である程度共有されていたのであれば、「未開の野」に取り残されている一般民衆、「充分

な皇国臣民の教育」を受けていない世代に対して新聞社とそのイベントが果たす役割への期待も、大きかっただろう。特に博覧会は、新聞を十分に読むことのできない人にも、会場にやってくる戦車や武器、ジオラマ、物珍しい動物や高価な産品などを見せ、日本の威容を示すことができるのであった。朝鮮統治において「新聞を読まない層に対してどのように働きかけるか」は、重要な問題であったと考えられる。

しかし、京城日報社の紀元二六〇〇年イベントは、「帝国の内」で展開したもので「帝国の外」が意識されることはほとんどなかったといつてよい。ほぼ同時期にアメリカで開催された博覧会において、日本の展示が対日イメージの改善を志向し、「欧米人に反感や違和感を抱かせない」ようにしていたのとは対照的であった。京城日報社のイベントで唯一、「帝国の外」が意識されたのは、朝鮮大博覧会の閉幕日にヒトララー・ユージェントの指導者一行が見学に訪れたときである。ヒトララー・ユージェントの京城到着日まで博覧会の会期が延期されていることから、京城日報社がヒトララー・ユージェントの朝鮮大博覧会訪問を何としても実現させようとしていた可能性は高い。日独伊三国同盟が結ばれた直後で、朝鮮の青年層を掌握する方策のモデルをドイツに求めていた総督府にとって、それは是非とも見せたい

ものだったのだろう。しかし、ヒトララー・ユージェントは到着した直後の短い時間に博覧会場を訪問しただけで、記事の扱ひも小さい。

京城日報社の紀元二六〇〇年のイベントと類似したイベントが、他組織の主催で行われていたことは、京城日報社の考えが朝鮮の植民地支配層において共有されていたことを示唆する。例えば四月には朝鮮体育協会が紀元二六〇〇年奉祝として、「全鮮各部落から面へ、面から郡、道、本府へ」と青年団員が賀表を継走する行事を実施することを決定した。秋の紀元二六〇〇年明治神宮国民体育大会の奉祝継走には、朝鮮、台湾、関東州も参加し、朝鮮では各道知事の奉祝文が京城に集められ、その後、釜山・下関經由で東京へと運ばれた。この時も青年団員が奉送を行った。伊勢神宮の聖火と火鑽具を朝鮮神宮へと運ぶことは、内地の崇高なものを朝鮮に行き渡せることの隠喩ととれよう。一方で、その後の奉祝継走のように、朝鮮の「赤誠」が内地へと運ばれ、帝国統合の象徴として用いられることもあった。これは、塩原の言葉を借りれば、朝鮮人が一様に皇国臣民の精神を身につけ「純一無雜」な皇軍に加わる一徴兵制の実現——という希望を示していたのではないだろうか。総督府の考える内地と外地のあるべき理想的関係が、反復されるイベントによって表現されていたのである。

合っていたのかについては、今後の課題としたい。

註

(1) 『紀元二千六百年祝典記録・第三冊』(以下、『祝典記録・第〇冊』と略す)四二、八五頁、JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A 10110006000、A 10110006300 (国立公文書館)

(2) 『祝典記録・第七冊』一一二頁 (Ref. A 10110012300)、『祝典記録・第九冊』三二七頁 (Ref. A 10110015400)、『祝典記録・第十冊』四六〇、六〇七頁 (Ref. A 10110015800、A 10110015900)、『祝典記録・第一一冊』一一二頁 (Ref. A 10110016200) 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』(中央公論新社、一九九八年)によると祝典事務局に報告が行われず『祝典記録』に記載されていない事業・行事も存在する。

(3) 御手洗辰雄編『南次郎』(南次郎伝記刊行会、一九五七年)四三―四五頁

(4) 皇民化政策に関する研究としては、金英達『創氏改名の研究』(未來社、一九九七年)、水野直樹『創氏改名…日本の朝鮮支配の中で』(岩波書店、二〇〇八年)、宮田節子ほか『創氏改名』(明石書店、一九九二年)など創氏改名に関する研究が最も多い。ほかに教育の問題を取り上げた研究として、稲葉継雄『塩原時三郎研究…植民地朝鮮における皇民化教育の推進者』(九州大学大学院教育学研究紀要)創刊

文化的イベントが植民地統治において果たした役割について考える上では、満洲でも、小学生の内地派遣や内地の娯楽界の著名人の招聘がみられたことにも注目すべきである。国際観光局と満鉄は、一九四〇年七月、優秀な日本語の作文を書いた五民族の男女、計一〇名の学童を満洲綴方使節として内地へと派遣した。これは、「純真なる学童を通じて新東亜建設に邁進する我国現下の正しき国情文化を満洲国民に伝へると共に我国民に満洲国の民族協和と躍進の実情を紹介し以て日満両国の親善提携に資せんとする」⁽⁸⁾もので、満洲日日新聞社は、小学生新聞に写真や記事を掲載するなどして、これを後援した。⁽⁹⁾ 満洲には、満洲日日新聞社招聘で舞踊家テイコ・イトウ(伊藤貞子)もやってきた。⁽¹⁰⁾ 「日本に学ぶ子供たち」と「日本からやってくる芸能」は、それぞれ、「文化的優位性をもつ日本とそれに惹かれる朝鮮・満洲」という歪んだ構造を確認させるものであった。

本稿で検討してきた京城日報社の紀元二六〇〇年記念イベントは、紀元二六〇〇年奉祝の全体からみると一部にすぎない。一月の紀元二六〇〇年祝典・奉祝会は、朝鮮はもちろんのこと「海外同胞」へ向けても中継放送され、帝國中が首相に唱和した。⁽¹¹⁾ 外地や海外における紀元二六〇〇年関連の様々な動きが、帝国日本の形成とどのように絡み

号（一九九九年三月）一八五—二〇八頁、磯田一雄「第三次・第四次朝鮮教育令下の国史教科書の改訂状況…「内地」及び「満州」の国史教科書との比較研究のための覚書」『成城文藝』一三〇号（一九九〇年三月）一二一—四八頁、志願兵制度・徴兵制に焦点を当てた研究として宮田節子「朝鮮民衆と「皇民化」政策」（未來社、一九八五年）がある。

(5) 高崎宗司「朝鮮の親日派…緑旗連盟で活動した朝鮮人たち」大江志乃夫ほか編『抵抗と屈従』（岩波書店、一九九三年）所収、一二三—一四七頁

(6) 宮田節子「創氏改名の時代」宮田ほか前掲書所収、三—四〇頁

(7) 古川隆久「『紀元二六〇〇年奉祝』と対外文化交流」『年報・近代日本研究』一二号（一九九〇年一〇月）二五九—二七七頁、同「紀元二千六百年奉祝記念事業をめぐる政治過程」『史学雑誌』一〇三巻九号（一九九四年九月）一一—三六頁、同「紀元二千六百年奉祝と日中戦争」『メディア史研究』三号（一九九五年六月）三〇—五二頁、同「皇紀・万博・オリンピック」（中央公論新社、一九九八年）、津金澤聰廣・有山輝雄編著『戦時期日本のメディア・イベント』（世界思想社、一九九八年）所収の古川隆久「紀元二千六百年奉祝会開催イベントと三大新聞社」、山野英嗣「紀元二六〇〇年奉祝美術展覧会とその周辺」、島山兆子「紀元二千六百年・全日本童話教育大会」、ケネス・ルオフ（木村剛久訳）『紀元二千六百年』（朝日新聞出版、二〇一〇年）、倉真一「大

阪の枚方遊園で開催された日向博覧会…紀元二千六百年奉祝と地方・新聞社・鉄道会社」『宮崎公立大学人文学部紀要』一九巻一号（二〇一二年三月）一一—一五頁。

(8) 紀元二六〇〇年奉祝と植民地の関係については、ケネス・ルオフ前掲書が一九四〇年の朝鮮・満洲の観光について論じ、京城日報社や満洲日日新聞社が奉祝記念イベントを開催していたことに言及しているが、十分に明らかにされてきたとは言い難い。戦時期のメディア・イベントに関する研究まで広げても、植民地の新聞社事業を対象とした研究は、筆者の見る限り「文化政治期」（一九二〇—一九三七）の京城日報社のスポーツ・イベントを対象とした森津千尋「植民地下朝鮮におけるスポーツとメディア…『京城日報』の言説分析を中心に」『スポーツ社会学研究』一九巻一号（二〇一一年三月）八九—一〇〇頁、があるだけである。

(9) しかし京城日報社は総督府に完全に従順であったわけではなく、『京城日報』の位置づけをめぐる対立もあった。寺内正毅総督の要請により一九一〇年に『京城日報』の監督に就任した徳富蘇峰は、総督府の庇護の下で経営を行う一方で、総督府からの過度な干渉を嫌った。その後一九二四年から一九二七年までの副島道正社長の時代においても、京城日報社の経営陣が言論の自律性を確保しようとする傾向があらわれた。有山輝雄『徳富蘇峰と国民新聞』（吉川弘文館、一九九二年）一九二—一九五頁、森山茂徳「現地新聞と総督政治…『京城日報』について」大江志乃夫ほか編『文

- 化のなかの植民地」(岩波書店、一九九三年)所収、三一三〇頁、李鍊「朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の創刊背景とその役割について」『メディア史研究』二二号(二〇〇六年一月)八九—一〇四頁。植民地朝鮮下における日本人経営新聞の通史に李相哲「朝鮮における日本人経営新聞の歴史(一八八一—一九四五)」(角川学芸出版、二〇〇九年)がある。
- (10) 京城日報社は、朝鮮語の総督府機関紙『毎日新報』(一九三八年四月に『毎日申報』から改題)も実質的に経営していた。
- (11) 『朝鮮出版警察概要(昭和十五年)』(朝鮮総督府警務局、一九四一年)五—六、八—九頁(国会図書館憲政資料室大野緑一郎関係文書二二七)
- (12) 唯一の朝鮮語新聞となった『毎日新報』の部数は、三十余万になっていた。新聞研究所編『日本新聞年鑑(昭和十六年版)』(新聞研究所、一九四〇年)一一〇—一二二頁
- (13) 前掲「朝鮮出版警察概要(昭和十五年)」七五頁
- (14) 京城日報社編『朝鮮年鑑(昭和十六年)』(京城日報社、一九四〇年)五七八頁
- (15) 『高等外事月報』に掲載された一九三九年末の民情調査では、日本語新聞を購読する朝鮮人は〇・四七七%となっている(『高等外事月報』九号(昭和十五年四月分)三二—三三三頁、『十五年戦争極秘資料集第六集 高等外事月報』不二出版、一九八八年、三八五—三八六頁)。
- (16) 『京城日報』一九四〇年一月一日朝刊一頁
- (17) 『京城日報』一九四〇年一月一日朝刊三頁
- (18) 『京城日報』一九四〇年一月三日夕刊二頁。三中井とは、朝鮮・満洲・中国などに店舗を構えていた日本人経営百貨店である。京城には一九一一年三月開店、新增築が完了した一九三三年には交通公社が設置されていた(林廣茂『幻の三中井百貨店』晩聲社、二〇〇四年)。
- (19) 『京城日報』一九四〇年二月七日朝刊七頁
- (20) 『京城日報』一九四〇年二月八日朝刊七頁
- (21) 『京城日報』一九四〇年二月七日朝刊七頁
- (22) 高岡裕之「観光・厚生・旅行」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』(日本経済評論社、一九九三年)九—五二頁
- (23) 堀井甚一郎「観光都市としての奈良」仲川明・森川辰蔵編『奈良叢記』(駸々堂、一九四二年)三三〇—三三二頁
- (24) 『京城日報』一九四〇年二月九日朝刊七頁
- (25) 藤村忠助編『京城日報社誌』(京城日報社、一九二〇年)二七—二九頁、『社史で見る日本経済史 植民地編 第二巻』(ゆまに書房、二〇〇一年)所収
- (26) 北支蒙疆視察団は帰城後「腹の底から日本人の誇を感じた」と語ったと報じられている(『京城日報』一九四〇年五月二十四日夕刊二頁)。
- (27) 朝鮮人の名前は、「本貫」「姓」「名」からなっていて内地の家族制度でいう「氏」はなかったが、朝鮮人も氏を新たに

創設することになった。これが「創氏」である。氏は必ずしも日本人風である必要はなく、期限までに届出がない場合は戸主の姓が氏となったが、「創氏」は、朝鮮の家族制度のあり方を根本的に変えるものだった。一方、「改名」は、任意とされ、裁判所の許可を受ければ日本風の氏名に改めることができるという制度の導入であった。

(28) 聖地巡拝団に関する記事はほとんど見られなかったにもかかわらず、三月に入って創氏改名を届出た巡拝団参加者に関する記事が掲載されているのは、注目に値する。記事は、「聖地巡拝の感激をそのまま」という見出しで、樞原神宮や伊勢神宮の参拝から皇国臣民としての気持ちが高ぶり、帰城するとすぐに「創氏選名(ママ)」を届け出たとある(『京城日報』一九四〇年三月一五日期刊五頁)。

(29) 『京城日報』一九四〇年一月一八日期刊七頁

(30) 同右

(31) 大串隆吉「戦時体制下日本青年団の国際連携―ヒトラー・ユーゲントと朝鮮連合青年団の間(二)」「人文学報・教育学」三三二号(一九九七年三月)一三三六頁、久保田武夫「朝鮮聯合青年団結成まで」『青年教育時報』一七号(一九三八年九月)五五―五八頁

(32) 『京城日報』一九四〇年一月三二日夕刊二頁。道によって正選手のみを載せている場合とそうではない場合があるため、全体数ではない。

(33) 『京城日報』一九四〇年一月二八日期刊七頁

(34) 『京城日報』一九四〇年二月二日夕刊二頁

(35) 宮田前掲書、五〇―九三頁

(36) 『高等外事月報』六号(昭和一四年一二月、昭和一五年一月分)六頁(前掲『十五年戦争極秘資料集第六集 高等外事月報』二四〇頁)

(37) 『高等外事月報』八号(昭和一五年三月分)六頁(前掲『十五年戦争極秘資料集第六集 高等外事月報』三二八頁)

(38) 『京城日報』一九四〇年二月四日期刊七頁、一九四〇年二月六日夕刊二頁、二月六日期刊七頁、二月七日期刊七頁

(39) 『京城日報』一九四〇年二月一〇日夕刊二頁

(40) 『京城日報』一九四〇年一月二六日期刊七頁、二月一〇日期刊七頁、二月一一日夕刊二頁、二月一一日朝刊七頁、二月一二日期刊七頁

(41) 『京城日報』一九四〇年二月三日期刊二頁

(42) 『京城日報』一九四〇年四月一四日夕刊二頁

(43) 『京城日報』一九四〇年二月四日期刊五頁、二月八日期刊五頁

(44) 『京城日報』一九四〇年三月二五日期刊七頁

(45) 『京城日報』一九四〇年四月一九日期刊七頁

(46) 『京城日報』一九四〇年四月二四日期刊七頁

(47) 『京城日報』一九四〇年四月二五日期刊七頁

(48) 同右。児童代表は、出発前には総監から、内地では児玉内相からも訓示を受けている。

(49) 『京城日報』一九四〇年五月二日期刊七頁

- (50) 『京城日報』一九四〇年五月五日夕刊二頁
- (51) 例えば、『高等外事月報』一三号(昭和十五年八月分)には、夏季休暇中に内地から帰省している朝鮮人学生の言動として、内地において朝鮮人が差別的に扱われているとする発言が複数掲載されている。二六一―二七頁(前掲『十五年戦争極秘資料集第六集 高等外事月報』五〇〇―五〇一頁)
- (52) 塩原時三郎「国民精神総動員について」『総動員』一卷三号(一九三九年八月)六一―六六頁
- (53) 『京城日報』一九四〇年四月二四日朝刊七頁
- (54) 『京城日報』一九四〇年三月三〇日朝刊五頁
- (55) 『新聞総覧(昭和一六年版)』(大空社、一九九五年)三一―五頁。『京日小学生新聞』(一九四〇年一〇月二七日、神奈川近代文学館所蔵)には、創氏改名を扱った四コマ漫画が載っている。「李クン」と呼ばれて不機嫌な男の子が「木村クン」と呼ばれて友達に誘いに応じる内容で、「創氏改名は決して強制などではない」という総督府の主張をコミカルに伝えている。
- (56) 『京城日報』一九四〇年四月一九日朝刊七頁、七月二一日夕刊三頁、二月一四日朝刊七頁
- (57) 『京城日報』一九四〇年八月一六日朝刊一頁
- (58) 『京城日報』一九四〇年八月三一日朝刊二頁
- (59) 『京城日報』一九四〇年九月一日朝刊一頁
- (60) 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』(風響社、二〇〇八年)一一四―一四六頁
- (61) 『京城日報』一九四〇年二月二七日朝刊七頁
- (62) 『京城日報』一九四〇年一月一六日朝刊二頁
- (63) 『京城日報』一九四〇年八月二一日朝刊一頁
- (64) 『京城日報』一九四〇年九月二六日夕刊二頁。汎太平洋博覧会は、一九三七年三月から五月にかけて二十九カ国が参加して開催された日本最初の国際博覧会である(山路前掲書、一四八頁)。
- (65) 山路前掲書、一三七―一四二頁
- (66) 『京城日報』一九四〇年八月一七日朝刊七頁、八月二五日夕刊二頁、八月二八日朝刊七頁
- (67) 『京城日報』一九四〇年九月三日朝刊七頁
- (68) 『京城日報』一九四〇年一〇月六日朝刊七頁。銃後奉公強化運動は、一九三八年一〇月の軍人援護に関する勅語を奉体するとして一九四〇年に初めて実施されたものであるが、一九三九年にも「銃後援強化週間」の名称で実施されている。「国民思想善導教化及団体関係雑件第三卷五。銃後強化実施二関スル次官會議決定事項通牒方ノ件」JACAR Ref. B04013006800、国民思想善導教化及団体関係雑件第三卷(145,18,003)(外務省外交史料館)
- (69) 京城日報社編『紀元二千六百年・始政三十周年記念 朝鮮大博覧会の概観』(京城日報社、一九四〇年一二月)巻頭三頁(大野緑一郎文書・図書四九)
- (70) 『京城日報』一九四〇年八月一三日朝刊七頁
- (71) 『京城日報』一九四〇年一〇月七日朝刊七頁

- (72) 『京城日報』一九四〇年一〇月二一日朝刊七頁
- (73) 『京城日報』一九四〇年九月一四日朝刊七頁、一五日朝刊七頁、二九日朝刊七頁、三〇日朝刊七頁。楊の名前は、史料状態が悪く、判読できない。
- (74) 『京城日報』一九四〇年五月三三日夕刊二頁
- (75) 東宝舞踊隊は京城公演を機に、皇軍慰問公演や中国での公演を行うようになった。『東宝十年史』（東宝宝塚劇場、一九四四年）一三二二頁
- (76) 『京城日報』一九四〇年九月二日朝刊七頁。九月二〇日朝刊七頁では、不愉快に感じたこととして奢侈品が売約済みになっていること、喫茶店で女給がケーキ・ワンといっていることがあるという来場者からの感想があったことを紹介している。
- (77) 『京城日報』一九四〇年一〇月二三日朝刊七頁、一〇月一七日朝刊七頁
- (78) 前掲『紀元二千六百年・始政三十周年記念 朝鮮大博覧会の概観』巻頭五頁
- (79) 『京城日報』一九四〇年八月二一日夕刊二頁
- (80) 『京城日報』一九四〇年二月七日朝刊二頁。京城日报社が紀元節にあわせてイベントを行った背景には、国民総動員聯盟のあり方に対する不満があった。
- (81) 塩原前掲講演記録、一六頁
- (82) 山本佐恵『戦時下の万博と「日本」の表象』（森話社、二〇一二年）二五七頁
- (83) 『京城日報』九月二二日夕刊二頁の記事によると、ヒトラー・ユーゲントは当初の予定では一〇月一〇日に京城到着し一日に博覧会を見学することになっていた。
- (84) 『青年問題座談会』『総動員』二巻九号（一九四〇年九月）六一―六二頁。前掲稲葉論文によると塩原は東京帝国大学法科大学独逸法法律学科で学んだことから、学生時代からドイツにシンパシーをもっていた。
- (85) 『京城日報』一九四〇年一〇月二四日夕刊二頁、朝刊七頁
- (86) 『京城日報』一九四〇年四月一日朝刊七頁。実施されたかは未確認である。
- (87) 『京城日報』九月一八日朝刊三頁、二〇日朝刊三頁、一〇月一九日朝刊七頁
- (88) 塩原前掲講演記録、一三頁
- (89) 日本観光事業研究所編『日本観光年鑑（昭和一六年版）』（日本観光事業研究所、一九四一年）六三頁
- (90) 同じイベントは、朝鮮でも日本旅行協会朝鮮支部主催、総督府学務局並びに鉄道局の後援で行われた（前掲同書、六五頁）。
- (91) 『満洲日日新聞』一九四〇年六月三日朝刊六頁、一一日夕刊二頁
- (92) 『京城日報』一九四〇年一二月二一日朝刊一頁、『祝典記録・第三冊』八八五頁、(Ref:A 10110007300)